

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

追憶の上海

1998年・中国映画・97分
配給/バンドラ

2004 (平成16) 年7月3日鑑賞
〈シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004〉

Data

監督：葉纓（イエ・エン）

出演：張國榮（レスリー・チャン）

／梅〔女亭〕（メイ・ティン）

／陶沢如（タオ・ツァオルー）

／トッド・パブコック

👁️👁️ みどころ

香港俳優のレスリー・チャンが、中国大陸の映画に出演したのはこれが3本目。国民党の支配下にある上海を舞台に、革命に夢とロマンを捧げた共産党員の役を、レスリー・チャンが見事に演じきった感動作！私の独断と偏見によれば、2003年4月、46歳で死亡したレスリー・チャンの『さらば、わが愛～霸王別姫』（93年）と並ぶ代表作！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

＜葉纓（イエ・エン）監督の変わった経歴＞

葉纓監督は1958年生まれで、1984年に北京電影学院に入学した陳凱歌や張藝謀より少し若い世代。その第2作となった、『レッドチェリー（紅櫻桃）』（95年）は、中国革命の犠牲者（烈士）の子どもたちが、モスクワの国際学院に留学し、「独ソ戦争」に巻き込まれていくという内容で、映画でのセリフはロシア語という異色なものだった。

そしてその後、3年の準備期間を経て撮ったのがこの『追憶の上海』だが、これはレスリー・チャン（張國榮）扮する共産党の闘士が主人公。そして、もう1人の主人公はアメリカ人の医師。だから、これも舞台は上海だが、映画の中のセリフはすべて英語。このように、（中国）革命を真正面からテーマに据えながら、中国人の側からだけではなく、外国人の目を通してこれを描くのが、葉纓監督の特徴。

これは、『中国映画の明星』（石子順著・2003年・平凡社）によれば、葉纓監督自身が、悲劇の将軍として有名な葉挺（イエ・ティン）という革命闘士の孫にあたることによるものとのこと。また、葉纓監督があえて外国人の目をフィルターとして中国の革命を描いているのは、「西瓜売りがいくら自分の西瓜は甘いよ、おいしいよと言ってもまわりはあまり信用しないでしょう？中国革命を描くのもこれと同じなのです」と考えていることに

よるといふことだ。こういう深い背景事情を理解すれば、この映画のすばらしさが一層よくわかるというものだ。

<中国大陸映画の第3作>

レスリー・チャンが中国大陸映画に進出したのは、①陳凱歌監督の『さらば、わが愛〜霸王別姫』（93年）が最初で、②『花の影』（96年）が第2作、そしてこの『追憶の上海』はそれに続く第3作。

<舞台は1936年の上海>

舞台は1936年の上海。当時上海は、蒋介石率いる国民党の支配下にあり、共産党は地下に潜るしかなかった。西安にやってきた蒋介石を張学良が軟禁した、1936年の「西安事件」によって、やっと共産党と国民党が抗日で一致し、「国共合作」がなったものの、それまでの蒋介石の国民党による中国共産党への弾圧はすごいもの。

その状況は、『宋家の三姉妹』（97年）における、孫文と結婚した次女慶齡（ケイレイ）と蒋介石と結婚した三女美齡（ビレイ）との対立の中にタップリと描かれているので、是非これも観てもらいたい。

それはさておき、この国民党支配下の上海に潜入したのが、共産党幹部の〔革斤〕（レスリー・チャン）とその妻を装った秋秋（梅〔女亭〕）。秋秋は〔革斤〕の（アジ）演説を聞いて、すっかりその魅力の虜になった女性。そして、この秋秋は、もと共産党員でありながら、仲間を裏切り、今は上海で秘密警察幹部として活動している皓明（陶沢如）の娘。仲間を裏切った父親の姿を目撃した幼い娘は、これにおびえ、完全にこの父親から離反してしまったわけだ。

その秋秋に与えられた、〔革斤〕の妻を装って上海に潜入するという任務は、秋秋にとつてすばらしいもの。なぜなら、あの憧れの演説をしていた〔革斤〕と、「同志として」常時一緒にいられるわけだから。そんな人間関係のもと、この映画は、冒頭からスリリングな展開に・・・。

<もう1人の主人公はアメリカ人の医師ペイン>

映画の冒頭は、上海にある華やかなクラブの中。そこで皓明とアメリカ人医師ペインがはじめて知り合ったが、アパートに帰ったペインを訪れたのは、「夫が死にそうだ」と訴えて往診を依頼した秋秋。ペインの勤務先の病院では往診は禁じられているにもかかわらず、こんな夜中の突然の往診の依頼をオーケーしたのは、秋秋からヒポクラテスの「医師の誓い」をもち出されたことその他、秋秋がとびきりの美女だったことに大きな理由がありそう・・・？

ペインを案内した秋秋の部屋でペインが見たのは、発作で苦しむ〔革斤〕の姿。その身

体は、銃創と手榴弾のキズだらけのすざましいものだった。とりあえずの処置を施し、翌日病院に薬を取りにくるよう秋秋に伝えたペインだが、この時既に、秋秋は〔革斤〕の妻ではないと直感していた。

<共産党弾圧に巻きこまれるペイン>

翌日ペインは、病院長に内緒で薬を手に入れ、これを持って自転車で〔革斤〕のアパートへ。何とも親切なことだ。やはり、美女のおつかいはそれだけ効用があるということか・・・？

しかし、そのアパートの前で、いきなりペインは逮捕。その理由は何とコミュニスト！つまり、「お前は共産党員だ」ということ・・・？「そんなバカな！」と抵抗したが、ついにペインは車の中に放り込まれ、そのまま連行されることに・・・。そこに通りかかったのが皓明。この皓明のおかげで、ペインはどうかこの難を免れることができたが・・・。

<秋秋に恋するペイン>

病院に戻り、やっと一息ついたペイン。ところが、そんなペインの前に姿を現したのが秋秋。「君のおかげで僕の人生はメチャメチャになるとこだった」と怒り狂って、秋秋を追い返したペインだったが・・・。泣きながら部屋を出ていった秋秋に対して、薬を渡していないことを思い出したペインは、薬を渡すため（ばかりではなさそうだが・・・）秋秋を追いかけて外に出て、電車に乗り込み、そこで1人泣いている秋秋を発見。ペインをみつけ、泣き顔の中に少しの笑顔を見せる秋秋。こんな「出会い」によって、ペインは完全に秋秋に恋をすることになってしまった・・・。

<〔革斤〕の発作の原因は？>

秋秋に案内されて〔革斤〕の隠れ家に入ったペインは、中国全土の地図を広げながら、革命のため、共産党のために命を投げ出して活動しようとしている〔革斤〕の姿を見た。そして、この〔革斤〕と、「同志として」固く結ばれ、その任務遂行に生きがいを見出して活動している秋秋の姿も見ることができた。果たして、そんな秋秋の気持の中に自分が入り込むことができるのだろうか・・・？

今日は大晦日。病院では、新年のカウントダウンのパーティーの真っ最中。そんなチャンスを利用して、〔革斤〕のレントゲン検査をしようとしたのがペイン。〔革斤〕と秋秋は大胆にもこの病院に乗り込んだ。そして、検査の結果、〔革斤〕の発作の原因は、脳の中に入ったまま残っている1個の弾丸のせいと判明。このため、時々発作がおこり、これを取り除かない限り、いつ死んでもおかしくない状態になっているというわけだ。

このように、〔革斤〕の診察はうまくいったものの、この大胆な行動は秋秋の顔を知る皓明にバレてしまった。〔革斤〕と秋秋は人質を楯にしてうまく逃亡したものの、ペインは速

捕されることに・・・。

<発作の時、〔革斤〕が思い出すのは？>

〔革斤〕には、かつて結婚し、共に活動していた同志の妻がいた。しかし、活動中逮捕された妻は、自分を囷にして〔革斤〕がおびき出されるのを防ぐため、自ら生命を絶った。

〔革斤〕が発作の時思い出すのは、この愛する妻と一緒に活動している自分の姿。発作がおこれば、〔革斤〕には夢と現実の区別がつかなくなるわけだ。

こんな〔革斤〕の症状は、次第に重くなっていった。そんな中、発作をおこし、妻の名前を呼び続ける〔革斤〕を鎮めるために、秋秋がとった行動は・・・？それは、自分が〔革斤〕の妻になりきり、夢の中で〔革斤〕と結び合うことだった・・・。

<父と娘の間におこる悲劇>

共産党員の逃亡に協力したとして逮捕されたペインは、病院をクビになり、友人も失い、今は孤独でみじめな生活。そんな落ちぶれたペインがある日見た新聞には、何と秋秋とその父親の皓明が「ヨリを戻した」との記事が。なぜだ？本当に秋秋は父親とヨリを戻したのか・・・？

秋秋の父親は、この娘との「再会」と娘の「転向」を祝うとともに、これをエサに〔革斤〕をおびき寄せるための大パーティーを企画したが、逆に、そこでおこった悲劇とは・・・？

<秋秋のお腹には〔革斤〕の子供が>

父親殺しの罪で逮捕された秋秋のお腹の中には、今〔革斤〕の子供の生命が宿っていた。そんな中、ペインのもとに、ある連絡が届けられた。それは、警察の目的はあくまで〔革斤〕。したがって、秋秋の釈放と引き換えに、〔革斤〕が自ら警察に出頭するというもの。そこで、その仲介交渉という重大な役割が、ペインに託されることになったわけだ。

そして、今日はその交換の日。自らの死を覚悟した〔革斤〕は、秋秋のお腹をなで、秋秋と固い抱擁をかわした後、連行されていった・・・。

<失われる生命と生まれてくる生命>

死を覚悟して自ら出頭した〔革斤〕の最後のシーンは、静かだが立かせるもの。こんな場合、ふつうのイメージでは、「共産党万歳！」というスローガンを叫ぶものだが、〔革斤〕にはそれはない。それはきっと、こんなスローガンを叫ぶより、秋秋を想う気持の方が強かったからだろうと私は思う。

そして、〔革斤〕が銃殺されたのと同じ時、秋秋のお腹からは〔革斤〕との間の新しい生命が誕生していた。悲しいけれども、何とも感動的なストーリー展開に感心！

<上海は？そして中国は？>

〔革斤〕が殺されたのは、中国共産党と国民党との対立によるもの。しかしその後、共産党と国民党は協力して共通の敵、日本に立ち向かうことになった。これが、抗日統一戦線の結成だ。日中戦争が本格化したのは、1937年7月7日に勃発したの蘆溝橋事件（7・7事変）から。

しかし、日本の敗戦も早かった。1945年8月15日、日本降伏。そして、中国国内ではその後再び、国共内戦が続いたが、その戦いで中国共産党が勝利をおさめ、1949年上海解放！

今日、上海のまちは、共産党の勝利と上海の解放を祝うパレードで、人が満ちあふれていた。

<秋秋は？ペインは？>

このパレードに可愛い女の子を連れて参加しているのはペイン。この女の子が、〔革斤〕と秋秋との間に生まれた子供であることは、バックに流れるペインのナレーションによって明らかになる。それによると、帝王切開によって出産は成功したものの、母体の生命は失われた。しかし、日中戦争の勃発によって上海から遠く奥地へ逃げのびたペインが、この1人娘を育ててきたというわけだ。

<泣かせるラストシーン>

戦争の後始末が進み、今日は一緒にされた〔革斤〕と秋秋の遺骨に再会できる日。小さな骨壺の中に納められた2人の遺骨に娘が対面した。そして、「開けていい？」と尋ねる娘に対してペインはうなずいた。涙ながらに、はじめて両親の遺骨に触り、対面する娘。この対面が終わり、外出した後のシーンがにくいもの。「遺骨の中に変なものがあったわ」と言いながら、娘が取り出したのは何と・・・？これでやっと、苦しかった〔革斤〕の発作もおさまっていることだろう・・・。

<レスリー・チャンの代表作>

レスリー・チャンは、アイドル歌手として人気を獲得した後、1978年からは映画界にもデビュー。そのハンサムな顔立ちで一躍スターとなった。日本では、1978年に公開された『男たちの挽歌』（86年）（彼の18作目）で一躍フィーバーし、日本でのファンが急増した。彼が、2003年4月に死亡するまでに出演した映画は50本以上に上っている。レスリーのアイドル的な作品は別として、有名なものは、『欲望の翼』（90年）、『樂園の暇』（94年）、『プエノスアイレス』（97年）など、王家衛（ウオン・カーウァイ）監督の一連の「香港映画」だが、私の私見では、これらは美男子で演技のうまい俳優なら、誰でもできるような役柄。

私がレスリー・チャンの出演作で最も感心したのは、何といても京劇の俳優に扮して、妖しげな魅力を発揮した『さらば、わが愛〜霸王別姫』(93年)における程蝶衣の役。これはとにかくすごい演技だった。そして、レスリー・チャンの2番目の感動作が、この『追憶の上海』だ。

<それはなぜか?>

中国では共産党讃歌の映画や、毛沢東主席や周恩来首相を讃える映画はあるが、それらは正直言って、あまり面白くない。それは、最初から映画製作の意図がミエミエとなっているからだ。逆に、中国映画で感動するのは、『芙蓉鎮』(87年)、『青い罌』(93年)、『活きる』(94年)など、①日中戦争、②国共内乱、③新中国の建設、④文化大革命の嵐、⑤その終結、という激動の時代の流れの中で、それに翻弄されながらも、懸命に生きていく人間の姿を描いた作品だ。

そう考えてみると、中国共産党の闘士と人間味あふれる魅力的な男性の両立というキャラクターは、今までほとんど映画に登場しなかったのではないだろうか？

この映画でレスリー・チャンは、共産党による革命を夢とロマンに満ちあふれたものと考え、その理想のために闘い、生命を捧げているが、現実はその理想的なものでないことは明らか。むしろ皓明のように、もがき苦しむ共産黨員の方が多かったはずだ。

しかしこの映画では、理想的に描くのが難しいはずの共産党の闘士という主人公を、レスリー・チャンがシリアスかつ魅力的に演じている。それも、何と大陸の中国人ではなく、香港俳優のレスリー・チャンが見事に演じているわけだ。レスリー・チャンが、この映画で大陸の人たちから熱狂的に迎え入れられたのも、なるほどと理解できるというものだ。

2004(平成16)年7月5日記